

## 市指定有形民俗文化財候補「山寺立石寺奥の院の大灯籠」

文化財保護委員 野口 一雄

- 1 種別 有形民俗文化財
- 2 名称 山寺立石寺奥の院の大灯籠
- 3 員数 1 基
- 4 所在の場所 山形市大字山寺 4 4 5 6 (立石寺奥の院の南側)
- 5 所有者 宗教法人 立石寺 (山形市山寺 4456-1)
- 6 物件の説明

## (1) 法量

全高 4 9 1 cm 最下段の幅 1 5 2 cm

## (2) 制作年代と構造

明治 28 年 (1895) 8 月に、山形市銅町の鋳物師、小野田才助により造立された。七層構造で、細かな形態にもかかわらず非常に肉薄で、高い技術で鑄造されている。明治時代には溶接技術がなかったため、層同士を溶接でつなぐのではなく、凸凹を組み合わせる構造になっている。

香川県琴平町金刀比羅宮の重要有形民俗文化財大燈籠 (『金毘羅庶民信仰資料集』昭和 57・58・59 金刀比羅宮) の調査・指定 (昭和 54) にかかわった印南敏秀氏 (現愛知大学教授／現静岡県文化財保護審議会委員・奈良県文化財保護審議会委員) は、金刀比羅宮の大灯籠と奥の院大灯籠を比較し、「大きいばかりではなく全面に細かな細工が施され、円形の基壇と六角形の基礎の間には天邪鬼が、竿には龍が巻き付けられているなど、精巧な細工 [蠟型カ] には驚かされるばかりだ。・・・山寺にくらべて金刀比羅宮のほうが一か月はやく奉納されたことになる。鑄造人は山形市の小野田才助で、これは山寺も同じである。意匠を見くらべてみると、二つの燈籠は火袋にいた文字が異なるくらいで、まったく同意匠となっている」(『こと比ら』昭和 57)) と記す。

小野田才助は明治 25 年 (1892) から 28 年 (1895) にかけて、銅造大灯籠を全国 3 カ所の寺社に奉納している。年代順にみると、明治 25 年と同 27 年 (1894) 宮城県金華山黄金山神社 [二基とも全高 4.89m]、奥の院に大灯籠が建立奉納される半年前の明治 28 年 3 月堀田村半郷 (現山形市蔵王半郷) の斯波兼松が発願主となり、香川県琴平町金刀比羅宮 [高 4.78m / 全高 6 m] [重要有形民俗文化財 1725 点の内の 1 点]、明治 28 年 (1895) 8 月 山寺立石寺奥の院である。これらの大灯籠は、才助に甥の平治郎、善蔵、養助らが協力して制作した。なお、黄金山神社大灯籠には、大正 10 年 (1920)、小野田商店 長谷川甚吉 (平治郎、4 代長兵衛の子) 修繕と刻されている。

## (3) 庶民信仰の地・奥の院と大灯籠奉納

立石寺奥の院は江戸時代、庶民信仰の地として広く知られていた。「山形棚佐賀志」(『山形市史編集資料』第 3 号)、『山縣掌故』(『山形市史編集資料』第 21 号)、「乩補出

羽国風土略記」(『山形市史編集資料』第33号)、「山形石ひろい」(『山形市史資料』第64号)などに記述がある。

「乱補出羽国風土略記」には下記のようにある。

重記曰(吹浦大物忌神社神官進藤重記、宝暦12/1762)

土俗奥の高野と云ふ、諸人卒塔婆を供養し碑を建、永世を期する故とぞ  
乱補云(里見光當の弟子某/寛政4/1792)

四月中の申の日〔日枝神社祭礼〕、七月七日〔磐司祭〕に祭礼あり、郡中より貴賤群集して、鉤くずに法名を注し是をかなから佛〔笹塔婆〕といふ香花水を備て回向をなして下山すること、国の風俗となる、何れの頃何人の始めしと云ふ事詳ならず

『山寺状』挿絵「山寺立石寺一山図」(享保11/1726)には、「とつこ(独鉤)水、おくのみん、二十四万人くやうちそう(供養地蔵)、こつとう(骨堂)などが描かれ、文久元年(1861)「山寺立石寺一山図」には、「他弔場、獨鉤水、奥ノ院、地蔵ソソ、骨堂、一切経堂」が描かれている。

印南氏は前書で、「山寺の奥の院に奉納された大きな銅製の燈籠は、霊の集まる目印として、霊に捧げる燈明として最も適切な場所に建つといえる。」とも記している。文久の一山絵図にあるように、奥の院はまさに有縁・無縁の「他弔場」であった。

川西町上小松の大光院(新義真言宗)にも歯骨を納める風習があった。福島県会津若松市八葉寺(真言宗豊山派)の高野山まいり(冬木沢まいり)は、遺骨の一部や爪や歯を小さな木製五輪塔に入れて奥の院に納める。「八葉寺奉納小型納骨塔婆及び納骨器」は国重要有形民俗文化財に指定されており、「冬木沢参りの習俗」は国「記録作成等を講ずべき無形の民俗文化財」に選択され、習俗は今日まで続く。

#### (4) 記載人名の特徴と信仰の広がり

立石寺住職壬生優田が発願主となり、中性院、華蔵院、性相院、金乗院が事務総代を務める。造立の寄付人は、当時の山寺村や山形市のほか、北は最上郡豊里村(鮭川村)、南は東置賜郡赤湯村(南陽市)、西置賜郡十王村(白鷹町)まで、広範囲に及ぶ。

確認できた寄付人は694人だが、不分明のところもあり総数はもっと多い。確認できた中で、山寺村140人、旧山形市内138人、高瀬村72人と、3地区(現山形市)で全体の半数を占める。さらに、立石寺に近い干布村(47人)や立石寺領があった高楯村(53名)(現天童市)が続く。

盆入り前夜の7月6日夕刻奥の院へ登る山寺夜行念仏講〔市指定無形民俗文化財、「山寺夜行念仏の習俗」平成11年「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」に選択〕や、翌日の磐司祭での獅子踊連が組織された地域と重なるようだ。

#### (5) 制作者 小野田才助について

弘化3年(1846)～大正4年(1915)

小野田家の出自は不明である。江戸時代中期、山形銅町の鋳物師小野田平左衛門(宝

曆 11/1761 没) が初代と伝える。才助は弘化 3 年に、山形銅町の鑄物師 8 代野田平左衛門の子として誕生した。9 代常治〔常吉〕(1898 没) は才助と同じ 8 代の子で才助の兄である。10 代は不明だか、才助が実質的な 10 代であったと思われる。

小野田家の墓所は銅町浄土宗迎接寺(こうしょうじ)にある。迎接寺には鑄物師の墓が多い。甥の子に彫刻家小野田高節〔『山形市史』別巻 2 88p〕がいる。才助は明治 39 年(1906)、還暦を記念し迎接寺に「青銅宝篋印塔」を鑄造、奉納した。大正 4 年(1915) 2 月、3 代目長兵衛義母〔才助の甥が長谷川長兵衛家に養子に入り、4 代長兵衛を名乗る〕への弔いに仏壇の鉦を贈り、暮れの 12 月 26 日に亡くなった。4 代長兵衛の流れが、銅町鑄物として今日に続くマルイ鑄造所である。

小野田才助は県外にも多くの作品を残した。確認できた 50 点余の内、梵鐘はほとんどが戦時供出された。太田市大光院供出梵鐘の写真絵葉書には、「梵鐘五十壺号」と書いた紙を持つ才助が写っている。才助は梵鐘だけで 50 口以上制作したようだ、

才助が制作の中心になったのだろう、総高 11m に及ぶ酒田持地院大仏も戦時供出された。小野田才助が制作した全国 3 か所の大燈籠が戦時供出を免れたのは、信仰上の重要性和制作技術の高さが広く知られていたためであろう。

写真：北野博司委員作成



西面



南面



東面



北面



俯瞰





各部法量



『山形名勝記』（著作者 菊地清〔新学孫〕明治34年）所収



「山寺立石寺奥の院」（明治 28 年）大灯籠奉納式典と思われる。  
 (『目で見える山形・上山の 100 年』1995 郷土出版社) 所収



小野田才助と日露戦役紀念ノ梵鐘 上州太田 大光院〔徳川家康が祖新田義重の菩提所として開山〕

